だんだん広がる、わせだみち

Walkable Street Design + Management

――多様な生活者が緩やかにつむぐ、日常と非日常のあいだ――

震災復興による建設された早稲田通りは、賑わい、静寂など特徴ある地区を巡り、北の丸公園へと辿り着く。
この道を中心とした整備を実施し、まちに新たな命を吹き込む。交差点の辻的空間や、街路デザインの妙が、人々の道の使いこなしを誘なう。
北の丸公園とその周囲は、歩きやすさを追求することで、早稲田通りと一体化した、緩やかな回遊性がもたらされる。
誰かの生活と、誰かの生活が重なり合って、このまちらしい生活のあり方が、だんだんと広がっていく。わせだの道とともに。

■エリア特性の把握

①早稲田通り

対象地域を背骨のように貫き、飯田橋駅と北の丸公園を接続している早稲田通りは、関東大震災に対する震災復興事業に起源を持つ歴史的な街路であり、北の丸公園の田安門前が起点となっている。飯田橋駅から北の丸公園に着くまでに、繁華街、オフィス街、文教地区といった用途に分かれており、街の雰囲気が賑わいから静寂へと、まるで参道のようなグラデーションを呈している。これと対応するように、居住、通勤、通学、観光といった来訪目的と、日常か非日常、朝と昼のような来訪日時が分かれており、街路という線的空間を、場所と時間によりシェアしている。

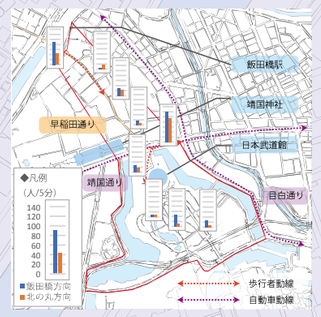
昭和 42 年 8 月の早稲田通り。この頃すでに飯田橋駅周辺・早稲田通り沿いからは生活の香りが感じられる。現在では住民のみならず、さまざまな属性の人が地域に堪間見える。（出典：川本三郎・泉麻人（2013）「加藤福夫写真全集　昭和の東京 3　千代田区」株式会社デコ）

②北の丸公園

旧江戸城の北の丸に位置し、明治時代には近衛師団の司令部や兵舎が置かれており、一般に開放されたのは 1969 年と最近である。このため、江戸、明治時代に由来する遺構や、貴重な自然が存在する森林公園として、広く人々に親しまれている。1964 年に東京オリンピックの柔道会場として建設された日本武道館では、ライブやイベント等が頻繁に開催され、大量の観客が訪れるため、周辺の密度は非常に高い。
一方、武道館とは離れた南部のエリアは、犬の散歩や、子連れなど、日常的な利用が多く見受けられた。多様な活動が可能な広場は南部のみにあり、他は立ち入りが制限されている部分も多い。

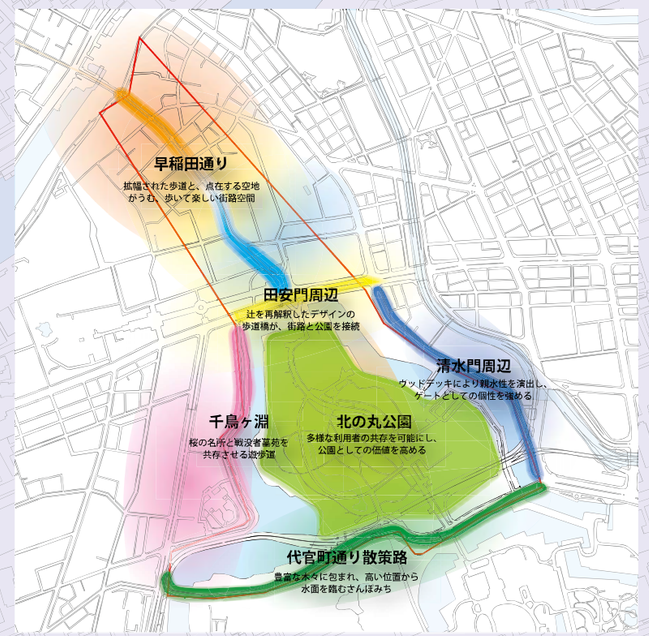
③歩行者交通量と動線

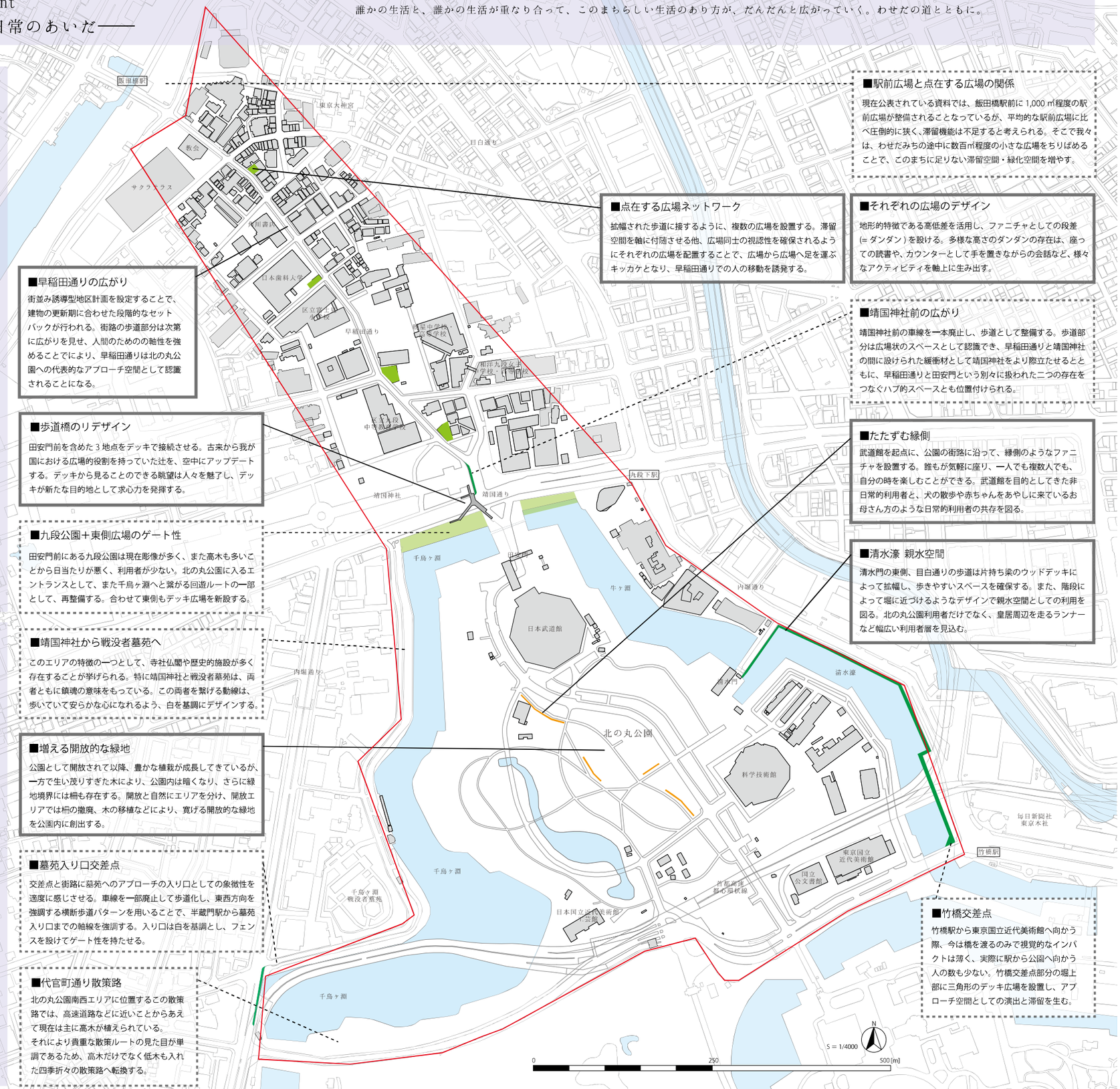
歩行者の動線は早稲田通りや目白通り沿いにあるものの、飯田橋駅周辺、日本武道館・靖国神社周辺で完結している。早稲田通りよりも、並行する目白通りと直行する靖国通りが周辺交通の軸となっている。



■提案コンセプト

早稲田通りの参道性を読み解き、その延長線上である北の丸公園やその周辺部分を、それぞれの個性に合わせて一体的にデザインしていく。つまり、街路のデザイン及びマネジメントを通した、50 年後の早稲田通り及び周辺一帯の空間像を提案する。
街路空間の物理的、意味的な拡張と、その空間と周辺における回遊性向上をもたらす仕掛けの数々が、人々のアクティビティを許容し、ここにしかない新たな価値が、早稲田通りを中心に広がっていく。





■駅前広場と点在する広場の関係

現在公表されている資料では、飯田橋駅前に 1,000 ㎡程度の駅前広場が整備されることなっているが、平均的な駅前広場に比べ圧倒的に狭く、滞留機能は不足すると考えられる。そこで我々は、わせだみちの途中に数百㎡程度の小さな広場をちりばめることで、このまちに足りない滞留空間・緑化空間を増やす。

■点在する広場ネットワーク

拡幅された歩道に接するように、複数の広場を設置する。滞留空間を軸に付随させる他、広場同士の視認性を確保されるようにそれぞれの広場を配置することで、広場から広場へ足を運ぶキッカケとなり、早稲田通りでの人の移動を誘発する。

■それぞれの広場のデザイン

地形的特徴である高低差を活用し、ファニチャとしての段差（= ダンダン）を設ける。多様な高さのダンダンの存在は、座っての読書や、カウンターとして手を置きながらの会話など、様々なアクティビティを軸上に生み出す。

■早稲田通りの広がり

街並み誘導型地区計画を設定することで、建物の更新期に合わせた段階的なセットバックが行われる。街路の歩道部分は次第に広がりを見せ、人間のためのの軸性を強めることでにより、早稲田通りは北の丸公園への代表的なアプローチ空間として認識されることになる。

■靖国神社前の広がり

靖国神社前の車線を一本廃止し、歩道として整備する。歩道部分は広場状のスペースとして認識でき、早稲田通りと靖国神社の間に設けられた緩衝材として靖国神社をより際立たせるとともに、早稲田通りと田安門という別々に扱われた二つの存在をつなぐハブ的スペースとも位置付けられる。

■歩道橋のリデザイン

田安門前を含めた 3 地点をデッキで接続させる。古来から我が国における広場的役割を持っていた辻を、空中にアップデートする。デッキから見ることのできる眺望は人々を魅了し、デッキが新たな目的地として求心力を発揮する。

■たたずむ縁側

武道館を起点に、公園の街路に沿って、縁側のようなファニチャを設置する。誰もが気軽に座り、一人でも複数人でも、自分の時を楽しむことができる。武道館を目的としてきた非日常的利用者と、犬の散歩や赤ちゃんをあやしに来ているお母さん方のような日常的利用者の共存を図る。

■九段公園＋東側広場のゲート性

田安門前にある九段公園は現在彫像が多く、また高木も多いことから日当たりが悪く、利用者が少ない。北の丸公園に入るエントランスとして、また千鳥ヶ淵へと繋がる回遊ルートの一部として、再整備する。合わせて東側もデッキ広場を新設する。

■清水濠 親水空間

清水門の東側、目白通りの歩道は片持ち梁のウッドデッキによって拡幅し、歩きやすいスペースを確保する。また、階段によって堀に近づけるようなデザインで親水空間としての利用を図る。北の丸公園利用者だけでなく、皇居周辺を走るランナーなど幅広い利用者層を見込む。

■靖国神社から戦没者墓苑へ

このエリアの特徴の一つとして、寺社仏閣や歴史的施設が多く存在することが挙げられる。特に靖国神社と戦没者墓苑は、両者ともに鎮魂の意味をもっている。この両者を繋げる動線は、歩いていて安らかな心になれるよう、白を基調にデザインする。

■増える開放的な緑地

公園として開放されて以降、豊かな植栽が成長してきているが、一方で生い茂りすぎた木により、公園内は暗くなり、さらに緑地境界には柵も存在する。開放と自然にエリアを分け、開放エリアでは柵の撤廃、木の移植などにより、寛げる開放的な緑地を公園内に創出する。

■墓苑入り口交差点

交差点と街路に墓苑へのアプローチの入り口としての象徴性を適度に感じさせる。車線を一部廃止して歩道化し、東西方向を強調する横断歩道パターンを用いることで、半蔵門駅から墓苑入り口までの軸線を強調する。入り口は白を基調とし、フェンスを設けてゲート性を持たせる。

■竹橋交差点

竹橋駅から東京国立近代美術館へ向かう際、今は橋を渡るのみで視覚的なインパクトは薄く、実際に駅から公園へ向かう人の数も少ない。竹橋交差点部分の堀上部に三角形のデッキ広場を設置し、アプローチ空間としての演出と滞留を生む。

■代官町通り散策路

北の丸公園南西エリアに位置するこの散策路では、高速道路などに近いことからあえて現在は主に高木が植えられている。
それにより貴重な散策ルートの見た目が単調であるため、高木だけでなく低木も入れた四季折々の散策路へ転換する。